

ミツアキの どうじゃ ジャズ道!

MITSUAKI presents DOUJA! JAZZ-do 連載 第18回 All photo by Mitsuaki Kishi



限りなく美しい夕暮れのベネツィア



詩的で落ち着いた街並のサチーレ



“イタリアで語りやっ!”

ロンドン～イタリア～パリと、久しぶりにお仕事抜きのリラックスした旅です。今回のメインの目的は、イタリアで作ってもらっている僕だけの特別なピアノの製作途中経過を、現地工場に見に行くというもの。

そもそもピアノという楽器は1709年、イタリアの宮廷音楽家であったバルトロメオ・クリストフォリによって発明されたそうで、イタリアとピアノは切っても切れない関係にあります。

ピアノは元々チェンバロという楽器から改良されたもので、ほとんどの楽器が強弱をつけることができる中、チェンバロは弦を引っかけて音を出すような方式だったため強弱の変化をつけにくく、クリストフォリはハンマーを使う事で強弱を表現できるものにしたのです。そんなわけでピアノという楽器の当初の名前は「クラビチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ（ピアノ～フォルテまで音の強弱をつけられるチェンバロ）」で、その後は省略されて「ピアノフォルテ」、現在は一般的に「ピアノ」と呼ばれるようになりました。

楽器演奏において強弱をつけられない場合、奏者の表現できる幅は激減してしまいます。そのため当時のチェンバロ奏者は楽譜に縛られず、自由な発想で装飾音符をつけたりすることで自

分の音楽を表現しようとしていたと言われていました。ピアノという楽器ができる以前から、楽譜というものは「神聖な約束事」ではなく、枠を超えて奏者の感性で音が綴られていたのですね。

さて今回僕が訪れたのは、ベネツィアから約60 km北にあるサチーレという街。ここに「ピアノ界のフェラーリ」と言われているブランド『ファツィオリ』の工場があります。ほとんどの有名ピアノブランドは100年から180年を越える歴史があるのですが『ファツィオリ』は1978年に創立された、まだ新興のブランド。にも関わらず、既にその評価は世界的に非常に高く、今年からシヨパン国際ピアノコンクール公式ピアノにも選ばれています。

創始者で現社長のパオロ・ファツィオリはイタリア家具製造業者の息子としてローマに生まれ、ローマ大学で工学博士の学位を取得した後、ロッシェニ音楽院でピアニストとしての学位も取得したという人物・・・まさにピアノ作りに最適な環境と才能を手に入れている人なのです。

そのパオロに、御縁があって僕のためにカスタマイズされたピアノを作ってもらうことになったのですが、何よりも“創始者直々”にピアノを作ってもらえるなんて、本当にピアニスト冥利に尽きます。



岸 ミツアキ

リーダー・アルバム11作のうち3作が『スイングジャーナル選定ゴールドディスク』を獲得し、米『コンコード・ジャズ・フェス』出演などグローバルに活躍するピアニスト。熱烈なジャズ愛好家でもあった故 藤岡琢也氏が最後に愛したジャズ・ピアニストとしても有名である。



サチーレのファツィオリ・ピアノ工場にて。製作中の僕のピアノの前で創始者パオロ・ファツィオリ氏とミツアキ



ベネツィアのジャズ・バー。店内はパーカーやロリンズの写真、楽器をモチーフにしたオブジェで飾られてお洒落でした。

今回の僕のピアノは世界中で『ファツィオリ』しか作っていない4本ペダルで、本体表面は木の根元の木目を生かした万華鏡のような模様のパール・ウォルナット、蓋を開けた裏側は黒バックにメイブルの象嵌細工が施され、僕の名前のイニシャル「M」と「K」がグリーン・ウッドで埋め込まれています。我ながらこだわり尽くしです(笑)。

ちなみにピアニストのこだわりという話ですが、シヨパンがこんなことを言っています。「私は身体の調子が悪い時はエラーールのピアノを弾く。なぜなら何の努力もせずに素晴らしい音を出せるから。しかし気分が良くて体力があるときは、思いのままに個性的な音を出せるプレイエルのピアノを選ぶ。」

ピアノはブランドによって様々な個性があり、ピアニストの好みや演奏場所の状況、楽器自体の状態などでも違ってくるので、一概にどのピアノが良いとか悪いとか言えるものではありません。僕も色々好きなピアノがありますが、今回サチーレを訪れ、まさに形が出来つつある“自分だけのピアノ”を目にした時は、正直身震してしまうほどの感動を覚えてしまいました! 妊婦さんが胎児の我が子の形を超音波で見た時の喜びに似た・・・とも言うのでしょうか?! (笑)

パオロが情熱をかけてサチーレで作っているピアノには、斬新な感性に加えて、素晴らしい芸術を作り上げた長い歴史と繊細で高度な技術を持つイタリア職人の気質と心意気のようなものも感じられます。進歩的な感覚と伝統的な要素が融合することで、新しい楽器の未来が開けるに違いありません。イタリアに感謝、サチーレに幸あれ?!



ポール・ウィナーズ「ライド・アゲイン」(1958年録音)

ジーン・ハリス「イントロデュシング・ザ・スリー・サウンズ+6」(1958年録音)